

シュタイナーとニーチェ

— ニーチェ論に潜在するゲーテ的自然観 —

井藤 元

1. はじめに — 問題の所在

近年、シュタイナー学校は世界規模で急増しており、その数は全世界でおよそ1000校にのぼるといわれている。これと相関して、関連図書が数多く出版され、シュタイナー（Rudolf Steiner 1861-1925）の教育実践は広範に亘って耳目を集めている。ところが、実践への関心の増大に比し、彼の思想の理論的研究は未だ十分な蓄積を持つに至っておらず、両者の乖離状況は慢性化しつつあるように思われる。例えば、小野が指摘している通り、シュタイナーの思想（人智学）が「教育哲学研究」の文脈で取り上げられることは、皆無に等しいのが現状である¹⁾。わが国に限らず、世界的に見ても状況は同じである。シュタイナー思想に関し、夥しい数の文献が存在するが、その思想を構造的に分析する試みは十分になされていないのである。

確かに、シュタイナー教育を支える当の思想は、人智学特有の独特な用語の頻出により、秘教的色合いを帯び、容易に接近を許さない。だが、その思想はある日突然、忽然と思想史の内に姿を現したわけではない。彼自身が独自の思想を打ち立てていくまでには、長い葛藤と模索の日々があった。30代までのシュタイナーは、堅実なる思想研究者として諸々の研究活動に従事しており、数多くの重要な著作を残している。この点についてコリン・ウィルソンは驚きをもって以下のように述べている。「いささか驚いたことにはシュタイナーは並々ならぬ牙えをもった哲学者、文化史家だったのである。これらの著作にはいかさまめいたところは微塵もなく、それどころか、思想史に完全に魅了され、自分の思想をできるだけ簡潔明瞭に語ろうとしている人という印象さえ受けた²⁾」。

その時期のシュタイナーは、諸々の思想家（ゲーテやニーチェ）について論ずる中で、間接的に自身の問題について言及していた。例えば、浅田が指摘している通り、初期の著作『ゲーテ的世界観の認識論要綱』（1886年 以下、『ゲーテの認識論』と略記）で、シュタイナーはゲーテの認識論と哲学を叙述するという体裁を取っているが、「そこで展開されているのは紛れもなくシュタイナーの認識論と哲学である³⁾」。

こうした事実は、シュタイナー思想への接近を可能にする一つの方法論を与える。つまり、特殊な人智学用語を用いずに、その思想を理解するための方途が得られるのである。シュタイナーと彼が依拠した思想家達との間の緊張関係を解きほぐすことで、彼の思想構造がそれらの枠組みを通じて理論的に解明可能となる。本論考では彼をとにかくも一度思想研究の場に連れ出し、彼が先人の思想をいかに読み解いたかを理解することで、彼の思想そのものの性質・傾向性を浮き彫りにさせる。

さて、シュタイナーがその思想的草創期に従事した諸々の研究のうち、本稿が取り上げるのは、彼のニーチェ研究である。一見するところ、超感覚的世界の实在を認め、その認識の必要性を説いたシュタイナーと、背面世界を破壊し、あらゆる超感覚的原理を唾棄したニーチェの間には、思想的に架橋不可能とも思える断絶が存在するように思われる。だが、実際、シュタイナーは、ニーチェ思想を高く評価し、それが自身の思想と多分に親和的であることを随所で指摘している。そして、高橋巖が述べているように、シュタイナーは基本的にニーチェを全面肯定していた⁴⁾。

また、重要な伝記的事実として、シュタイナーとニーチェの歴史的接点が挙げられる。シュタイナーは、ニーチェの妹エリーザベトの依頼を受けて、ニーチェ蔵書目録を作成し、さらには、ニーチェ思想について彼女に個人的教授を行った⁵⁾。そうした縁で、シュタイナーは、晩年のニーチェの病床を訪れることができた。彼はその場面を『自伝』にて詳細に振り返っており⁶⁾、その面会は彼にとって「忘れられない体験⁷⁾」となった。シュタイナーは、「あたかも自分のために書かれたかのように」ニーチェを理解したと自負し⁸⁾、その思想に度々言及した（ホフマンが示している通り、シュタイナーの著作において、ニーチェへの言及箇所は、500箇所以上にのぼる⁹⁾）。ニーチェ理解の妥当性に対する彼の自信は相当なもので、ニーチェと出会う以前の段階（『ゲーテの認識論』）で既にニーチェと同様の思想に到達していたとさえ述べている。「6年前にフリードリッヒ・ニーチェの著作を知ったとき、彼と同様の理念が、すでに私のなかに形成されていた。私はニーチェとは別個に、彼とは別の道で、彼が『ツァラトゥストラ』『善悪の彼岸』『道徳の系譜』『偶像の黄昏』において述べたことに一致する見解に到った。1886年の私の小著『ゲーテ的世界観の認識論要綱』のなかに、…ニーチェの著作と同じ志向が表現されている¹⁰⁾」。

そうしたいささか過剰とも思える彼の自負をめぐり、本研究においてその理解が妥当か否かは問題にしない。そうではなく、ここではシュタイナーのニーチェ理解に対する自負を逆手に利用する。拙論で示した通り¹¹⁾、ニーチェ思想特有の形式（アフォリズム）は、しばしば、読み手自身の思想的傾向性を映し出す試金石となる。つまり、「ニーチェ」という試金石によって、シュタイナー思想がニーチェに翻訳され、その構図がニーチェを通じて浮き彫りになるのである。これにより、先に示した本論文の目的（人智学に依らずにシュタイナー思想を解明する）達成のための方途が得られる。

無論、シュタイナー思想の全体像が、ニーチェによって理解可能となるわけではない。彼の思想は、確かにニーチェの問題圏を超え出る要素を多分に含んでいる。だが、網羅的に理解可能とはならないまでも、本研究の方法により、人智学的人間形成論の核心部（「自由」獲得の問題）へと接近可能となる。「自由への教育」を謳うシュタイナー教育の最重要問題、すなわち「自由」獲得の問題がニーチェ論分析（とりわけ「超人」思想への言及）を通じて明らかになるのである。

ところが、そうした意義を有するにも関わらず、シュタイナーとニーチェ、両者の思想的連関について、先行研究で十分に論じられることはなかった。両者の関係が伝記的事実として取り上げられることはあっても、本研究と同様の問題関心を有する研究はまだない。ウェルバーンは、シュタイナーがニーチェのうちに「解放の知識」を見出だしたと述べ、『自由の哲学』（シュタイナー四大主著の一つ）とニーチェ思想の関係を示唆している¹²⁾。同様に、ジーマンス¹³⁾、

リンデンベルク¹⁴⁾、ボック¹⁵⁾、スワシャン¹⁶⁾も、ニーチェ思想と『自由の哲学』の連関を指摘している。だが、それらはあくまで示唆に留まるものにすぎない。我が国においては、森本がシュタイナーとニーチェの比較検討を試みているが、これもまた両思想の同質性を示すに留まるものであり、十分な検討を試みているとは言い難い¹⁷⁾。

さて、彼のニーチェへの傾倒の理由を辿っていくと、そこに、ゲーテの存在が浮かび上がってくる。結論を先取りすることとなるが、シュタイナーはゲーテ自然科学研究を經由してニーチェに対し肯定的見解を持つに至った。ニーチェへの傾倒の背景には、彼のゲーテ自然科学研究が潜在していると考えられるのである。本研究では、最終的にシュタイナーとゲーテ自然科学の関係にまで遡ることにより、シュタイナーの「自由」の哲学を根底で支えるゲーテ的自然観を顕在化させたい。

2. シュタイナーは「超人」をいかに読み解いたか ―方法論としてのニーチェ論

2-1. ニーチェ「超人」思想への賛同

では、シュタイナーは、ニーチェをいかに読み解いたか。1895年に発表された『ニーチェ―同時代との闘争者 *Friedrich Nietzsche, ein Kämpfer gegen seine Zeit*』を中心に読み解いていく。

ここで焦点化するのとは、とりわけ彼がニーチェの「超人 *Übermensch*」をいかに読み解いていたか、という点。シュタイナーは、「超人」思想のうちに、自身の「自由」の哲学との通底を見てとり、その思想に共鳴している。そして彼は「自由」をめぐる問題について、「超人」思想に賛同する形で論じている。以下、彼が「超人」思想のいかなる点に賛同したか、その内容を三点にまとめる。

第一に、「自由」獲得に至る過程の問題。周知の通り、『ツァラトゥストラ』は、超人となるために（「自由」獲得のために）、人間の精神は、三段階の変容を経験せねばならないことを示した。有名な三変の思想である。ニーチェは、人間の行為を制限するすべてのものを脱皮するよう我々を導こうとしているのであり¹⁸⁾、端的に人間性それ自体が脱皮されるべきであることを訴えた¹⁹⁾。この変容の内実を端的に言い表したのが「世界を失った者は自分の世界を獲得する *Seine Welt gewinnt sich der Weltverlorene*」²⁰⁾という『ツァラトゥストラ』中の言葉である。自らの世界を獲得すること、このことが「超人」に至るための要件となるのであるが、そのために人はまず彼の世界を失わなければならない。精神の第一段階（駱駝の段階）において、我々の精神は、「自分に課せられたものを徳と呼ぶ²¹⁾」。この段階において、「精神は自分の道を行かず、自分が仕えるものの道を行く²²⁾」のであり、「不自由な精神は、因習に従って決断する²³⁾」。ニーチェは、我々に徳や因習を課すもの（言い換えるならば、超感性的な形而上学的諸価値）から意味や価値を与えられた状態を駱駝の段階と位置付け、これを脱却すべき段階とみなした。超感性的な諸価値は、生を確保し、高揚させるのに役立つか否かを見極めるための単なる目安でしかない。生を促進するかどうか、最大の基準なのであり、ニーチェは、例えば、判断のための論理的証明の根拠に重点を置かなかった。「彼にとっては判断を論理的に証明することではなく、その判断の影響下にいかによく生きるかが重要である²⁴⁾」。シュタイ

ナー＝ニーチェは、共に「自由」へと至るためにまずもって彼を外的に規定する「世界」を喪失する必要性を訴えたのである。

第二に、「世界の喪失」の意味付けの問題。ニーチェはヨーロッパの文化形成を導いてきた超自然的、超感性的諸価値を唾棄すること（世界の喪失）が、「超人」への端緒を開くと考えた。それはまた「背面世界 Hinterwelt²⁵⁾」に支配された「世界」の喪失と換言できるのであった。「かつて<真の世界>に対して<仮象の世界>と呼ばれていたもの、いまはそれがすべてなのである²⁶⁾」。

したがって、ニーチェにとって「世界の喪失」は、決して厭世主義、現実からの逃避を意味しない。それどころか、それは真に現実を肯定するために不可欠の一過程である。シュタイナーもまた、世界からの逃避はあくまで、過渡的段階に過ぎないという点を殊更に強調し、ニーチェに賛同する。つまり、世界の喪失それ自体を目的としてはならないのであり、「世界からの逃避を、世界に友好的な思想を作るための手段と考察せず、目標・目的と考察する哲学者²⁷⁾」は、シュタイナーによっても否定される。「本当の哲学者は、一面では現実から逃れるのだが、それは他面でもっと深く現実のなかに入り込むためである²⁸⁾」。より深く現実に入り込むために、「世界の喪失」が要請される。「世界の喪失」は「自分の世界」の獲得のための条件となり、かくして「超人」への道が拓かれる。シュタイナーによれば、ツァラトウストラもまた、この過程（世界の喪失→自分の世界の獲得）を辿った。

第三に、獲得された「自由」の内実について。「自由」は人間が自分の内側に行為の理由を持ち、いかなる外的な力にも屈服しない場合にのみ実現される。「背面世界」からの外的要請に支配されているのは、決して「自由」は達成されない。「背面世界」という架空の原理によって人間のあらゆる行動が規定されていることが問題なのであり、行為の動機を自らの内に見出すことが「超人」の必須命題である。シュタイナーも指摘する通り、そうした状態は極めて過酷である（シュタイナーは『力への意志』から「近代的な徳や南風のもとで生きるよりも、むしろ氷の中で生きろ！」を引用し、ニーチェはこの命題を生きたと述べている²⁹⁾）。したがって、シュタイナーとニーチェ、両者が示す「自由」は、単に自己本位に振る舞うこととは厳然と区別される。それは決して己の欲求の赴くままに活動することではない。「自由な精神は、動物的な衝動を完全に自由に活動させ、あらゆる法律的な秩序を廃止しようという見解の信奉者ではない。たんに自分の動物的な本能に従おうとするのではなく、道徳的原動力、自分自身の善と悪を創造することのできる者たちのために、彼は完全な自由を要求する³⁰⁾」。

2-2. ニーチェ思想への不満

では、自分自身の善と悪の創造はいかにして可能となるのか。シュタイナーは、この問題に自覚的であったか否かが、自身とニーチェの思想的な分水嶺になると考えた。シュタイナーにとって、そうした道徳的原動力は、明晰に意識化されねばならないものであった。「人間は個人的な目的を決定するが、意識をもって決意するのである。無意識に発生し、そののちに意識に上る本能に従うか、前以て明瞭な意識で生産された思考内容に従うかは、大きな違いである³¹⁾」。もし、このことに自覚的でなかったならば、因習の奴隷でなくとも、自分自身の本能の奴隷であると断罪されかねない。ニーチェのディオニュソスの人間は、そうした問題性を孕んでいる

とシュタイナーは考えた。

もっとも、そうしたシュタイナーの指摘が妥当か否かについては、慎重に吟味する必要がある。スピックスが指摘している通り、ニーチェにとって「ディオニュソス的な個人とは、生の過剰に沸き立つ力がよくコントロールされた調和的な表現³²⁾」である。つまり、後期ニーチェに至って「ディオニュソス」は、アポロンの原理をも取り込んでいるのであった。この点について、ピヒトもまた「ディオニュソスの哲学は、狭義の<ディオニュソスの>であるとともに、<アポロンの>でもある³³⁾」と述べている。こうした指摘に鑑みるならば、ディオニュソスの人間を単なる本能への隷属状態とみなすことには問題があろう。だが、シュタイナー思想の理論的解明を本務とする本研究では、そうしたシュタイナーのニーチェ解釈の不備については不問に付すことにしたい。

さて、シュタイナーはニーチェの思想的不備を指摘し、これを補完すべきものとして「道徳的想像力 *moralische Phantasie*」という概念を提示した。「道徳的想像力を有する者だけが本当に自由である。人間は意識的な原動力に従って行動しなければならないからだ。そのようなものを自分で生産できないなら、同じものを外的な権威、あるいは、良心の声というかたちで自分のなかで囁く因習から与えられるにまかせねばならない。たんに自分の本能に耽る人間は、動物のように行動する。自分の感覚的本能を他人の思想の下に置く人間は不自由に行動する。自分の道徳的目的を自ら創造する人間が自由に行動する。ニーチェの論述のなかには、道徳的想像力が欠けている³⁴⁾」。

ニーチェ思想には「道徳的想像力」が欠けている。シュタイナーはそのことを強調する。この「道徳的想像力」という概念は、シュタイナーの哲学的名著『自由の哲学』(*Die Philosophie der Freiheit* 1894年)において提示された概念である³⁵⁾。スワシャンも指摘している通り、「シュタイナーによるこの著作[『自由の哲学』 註：筆者]が、ニーチェと密接な関係にあるという事実、そして良心に関するニーチェの最も重大な葛藤がこの著作において解決に至っているという事実³⁶⁾」は極めて重要である。「道徳的想像力」についてのより具体的な叙述を見てみよう。

「自由であるということは、行為の根底にある表象内容（動機）を、道徳的想像力によって自分から決定できるということである。機械的な過程や世界外にいます神の啓示のような私以外の何物かが私の道徳表象を決定するのだとすれば、自由などあり得ない。したがって私自身が表象内容を生み出すときが自由なのであって、他の存在が私の中に植えこんだ動機を私が行動に移せるとしても、それで自由になるのではない³⁷⁾」。

すなわち、人間は、「道徳的想像力」によって、彼の理念の総体から具体的な表象を生み出す際に「自由」となる。彼の理念を実現するために、自由な精神の持ち主が必要とするものが「道徳的想像力」なのだという。シュタイナーは、「自由であること」と「道徳的であること」を不可分のものと考えたのである。人間は意識的動機に即して行動すべきであるがゆえに、「道徳的想像力」を持つ者だけが真に自由なのだとされ、もしその動機を自分で生み出せない場合、彼はそれを外部の権威などから与えられることとなる。例えば、「おまえの根本命題がすべての人間にも当てはまるような行動をせよ」というカントの命題は、シュタイナーにとって「す

すべての個人的な行為を死へ追いやる」ものとされる³⁸⁾。「すべての人がやるような行動の仕方が私にとっての基準なのではなく、個々の場合に何をしたらいいのかが問題なのである³⁹⁾」。こうした道徳観を、シュタイナーは端的に「倫理的個体主義 Der ethische Individualismus」と名付ける。「倫理的個体主義」は、個々人がそれぞれ自己の根本的動機を認識し、それぞれが各々、理念的総体から表象を生みだすことを是とするものである。パーマーが述べている通り、「シュタイナーは、個人と、個性性に由来し、個性性に基づく道徳を、人間社会がその上に築き上げられるべき基盤として見ている⁴⁰⁾」のだ。

『自由の哲学』におけるこうした主張は、恣意的な欲求のままに生きることを肯定するものと受け取られるかもしれないが、それは、決して自己本位的なものではない。「道徳的想像力」に基づく行為は、個々人の「直観 Intuition」に由来するものであり、それは理念界から個々の状況に応じて汲みだされるものとなる。「私と私の隣人との相違は、…共通の理念界の中から私の隣人が私とは異なる直観内容を受け取る、という点にある。私の隣人はその人自身の直観内容を生かそうとし、私は私自身のそれを生かそうとする。…道徳的な誤解やぶつかり合いは道徳的に自由な人間の場合、まったく存在し得ない⁴¹⁾」。この引用にも示されているように、「道徳的想像力」は、しばしば「直観」と言い換えられる⁴²⁾。

では、「直観」と密接な連関を有する、こうした「道徳的想像力」という概念は、いかなる思想的背景から導き出されたのであろうか。その出自を探るうえでの手がかりが『自由の哲学』のうちに記されている。興味深いことに、「道徳的想像力」について論じた箇所（第12章）において、シュタイナーは、我々が道徳的に行為するためには自然科学の知識が必要であると述べているのだ。

「道徳的に行動するためには、行動範囲の諸事情をよく知っていなければならないが、特によく知っておく必要があるのは、自然の法則である。必要なのは自然科学の知識であって、倫理学の知識ではない⁴³⁾」。

シュタイナーがここで「自由」の問題を論ずるにあたって自然科学的知識の必要性を訴えるのはいかなる意味においてか。「自由」と自然科学、両者を結びつけるものとは何か。シュタイナーは『自由の哲学』の扉に「自然科学の方法による心の観察結果 Seelische Beobachtungsergebnisse nach naturwissenschaftlicher Methode」という副題を掲げたのであるが、その意味するところとは何か。

こうした問いに回答を与えるため、次節では、シュタイナー思想に潜在するゲーテ（自然科学）の存在に目を向ける。というのも、以下に詳述する通り、ゲーテこそ、シュタイナーとニーチェを媒介する存在であったと考えられるからだ。そしてゲーテに目を向けることで、シュタイナーが「自由」を論ずる際にもちだした「道徳的想像力」の思想的出自が明らかとなる。

3. 伏線としてのゲーテ自然科学研究

3-1. 「道徳的想像力」の思想的背景

「道徳的想像力」の思想的背景を辿ってゆくと、不思議なことに、ゲーテの存在が浮かび上がってくる。ゲーテの自然科学研究は、自然そのもののうちに内在する、決して汲みつくすことのできない無限の意味を読み解こうとする試みであった。自然は単なる仮象ではなく、それ自体を永遠なるものの不断の現れとみていたのである。シュタイナーは思想研究者時代、専らゲーテ自然科学研究に従事し、生涯にわたって、それを自らの認識論的基盤と位置付けた。

そうしたゲーテ自然科学とニーチェ思想はそもそも思想的に極めて親和的である。ゲーテだけでなく、ニーチェもまた「大地の意味 der Sinn der Erde⁴⁴⁾」を強調した思想家であった。吉澤が述べている通り、「大地の意味」と言われるとき、そこにはすでに、「大地」こそがもともと「意味」の根源なのであり、決して「大地」の彼岸に「意味」の根源が存するわけではない、ということが含意されている⁴⁵⁾。ニーチェ以前に、この「大地の意味」を一貫して訴え続けたのが、他ならぬゲーテだった。学術雑誌『モルフォロギアゲーテと自然科学』では、ゲーテとニーチェの自然観をめぐって特集が組まれ、両者の思想的関連が検討されている。そこにおいて、竹田は「堅固で調和ある生」を範とするかぎりにおいて、時代の隔たりにもかかわらず、ニーチェはゲーテの傍らにいた⁴⁶⁾と指摘している。

ここで先の引用を今一度思い起こそう。シュタイナーは、ニーチェに出会う以前の著作『ゲーテの認識論』において、既にニーチェと同様の思想に到達していたと語っていた。このことは、「ニーチェ」論の背景に、彼のゲーテ自然科学研究が潜在していたことを暗示している。この点はニーチェへの傾倒の背景を浮き彫りにするうえで極めて重要である。以下、シュタイナーがゲーテ自然科学研究を経由した後に、ニーチェ研究に臨んだというその事実に着目する。つまり、シュタイナーとニーチェの間にゲーテを介在させて考察する。ニーチェ解釈の根底にゲーテを位置付ける中で、人智学に貫流する思想内容、より具体的には先の「道徳的想像力」の思想的背景が浮かび上がってくる。

3-2. ゲーテの「自然認識 Natureerkennen」

周知の通り、シュタイナーは思想家としての歩みの第一歩を、ゲーテ研究者として踏み出した。彼は、キュルシュナー版『ドイツ国民文学叢書』中のゲーテ自然科学論文の編集の仕事に依頼されて以降、1886年に処女作『ゲーテの認識論』を出版し、1897年には初期のゲーテ研究の集大成ともいえる『ゲーテの世界観』を世に送り出した。彼はそうした過程で、ゲーテのうちに自身と同一の思想的傾向性を見出し、ゲーテ思想への深い傾倒と共鳴の下、諸々の論文を執筆した⁴⁷⁾。

ここで留意すべきは、シュタイナーにとってゲーテ自然科学研究の学説的妥当性が重要だったわけではないということである。ゲーテの自然に対する態度、彼の自然観察の方法こそがシュタイナーにとって問題となった（「ゲーテが到った個々の事実は、それ自体が重要なのではなく、彼の世界観全体を裏付けるために重要だった⁴⁸⁾」）。我々が感覚界を正しく認識すれば、それが常に精神の現れであることが見出されるということ、シュタイナーは『ゲーテの認識論』で

訴えた⁴⁹⁾。「ゲーテは自然現象に対する徹底的な沈思だけで、自然のうちに存在する霊的現実の直観的知覚に至った⁵⁰⁾」。では、そうしたゲーテ的自然観とはいかなるものか。まずはその特徴を確認しておく⁵¹⁾。

3-3. 原型 (Typus)、メタモルフォーゼ (Metamorphose) と直観

ゲーテ自然科学を特徴付ける鍵概念が「原型」と「メタモルフォーゼ」である。ゲーテはあらゆる有機的自然の根源的同一性を見抜き、有機体の構造が基本的には同一のものであることを確信し、これを「原型」(すなわち「原植物」と「原動物」)として把握するにいたった。「原型」は動植物の典型的な姿に近く、現実世界における多様な動植物を包含し、個々の姿へと変容する可能性を内包している。また、ゲーテは同一の基本構造を持つ植物や動物の全体が、同一の部分の「メタモルフォーゼ」によって形作られると考えた。ゲーテは、形態の形成と変形を意味する「メタモルフォーゼ(変態)」をすべての生物に認め、この概念を生物学の中心に据えることにより、生命現象を動的に捉えた。そして、彼にとって「原型」と「メタモルフォーゼ」とは不可分な概念だった。ゲーテは一方においては自然の単純性、同一性、不変性を示す「原型」を、他方においては自然の差異、多様性、変幻自在性を示すメタモルフォーゼを見いだしたのである⁵²⁾。

では、ゲーテ的自然認識の中枢をなす「原型」はいかに把握されるのだろうか。ここにおいて、ゲーテ的自然認識の最大の特徴の一つ、「直観」が鍵概念として浮かび上がる。「直観」は自然を単に漠然と眺めるのではなく、注視を意味する。そしてこの「直観」こそ、「原型」や、「色彩環」に関する理論を生み出したものにほかならない。こうした自然は、分析によっては到底捉えうるものではなく、「直観」を通じてはじめて把捉される⁵³⁾。

だが、学問の世界で「直観」は蔑視され、「直観」によって学問的真理を得ようとした点こそがまさにゲーテの欠陥だと見なされた⁵⁴⁾。「直観」自体が学問の一原理であり得ることは否定され、それが学問的価値を有するのは、科学的に証明された場合に限るとされてきたのである。しかし、そうした批判に真っ向から対立し、ゲーテは「直観」こそ正しい認識方法であると考えた⁵⁵⁾。そしてシュタイナーはこうしたゲーテ的認識に賛同した。

3-4. ゲーテ的直観の「自己認識」への応用

さて、『ゲーテの認識論』、「新版の序」において、シュタイナー自らこの著作を評し、それは彼が「のちに語り、出版してきたすべてのことの認識論的基礎付けであり、弁明である⁵⁶⁾」と述べている。シュタイナーにとって、ゲーテ的認識は、単に「自然認識」としてのみならず、人間の「自己認識 Selbsterkenntnis」、ひいては「自由」獲得のために不可欠である。すなわち、「自由」獲得のために必須の「自己認識」は、ゲーテ的直観によって可能となるのである。シュタイナーは、ゲーテ自然科学から抽出した「直観」を、人間の「自己認識」に応用し、これをもって行為の動機の認識が可能になると考えた。自然科学の方法が忠実に保持されるならば、精神領域の認識へと導かれると考えられていたのである。

かくして、『ゲーテの認識論』では、「自然認識」から「自己認識」の問題へとゲーテ的認識の応用を図ることにより、「ニーチェ」論と同一の問題が取り上げられるのであった⁵⁷⁾。『ゲー

『ゲテの認識論』では、ゲテ的自然認識の特質が語られた後、議論は最終的に「自己認識」へと及ぶ。そこでは、『ニーチェ』同様、人間が自らの主となること、すなわち、自分の世界を獲得することの重要性が説かれ、「自由」の内実が示されていた。そして特に「自己認識」に際し、必要とされる「直観」が、『自由の哲学』では「道徳的想像力」と呼ばれていたのであった。ゲテ的自然認識が人間の「自己認識」（「自由」の問題）に応用される際、「直観」は「道徳的想像力」と言い換えられる。ゲテ自然科学において「直観」は有機的自然（「原型」）を認識する際に不可欠であったが、その「直観」はそのまま「自己認識」の場面でも必須のものとしてとされるのであった。『自由の哲学』「1918年新版のためのまえがき」に記されている通り、このテキストの主要課題は、次の二つの問題への回答を与えることであった。すなわち、「人間の本性を直観して、この直観が、生活体験や科学を通じて人間に出会うすべてのものの支柱であることが判明するような可能性は存在するの⁵⁸⁾」。「人間は意欲する存在として、彼に自由が帰せられるべきものなのか、それともこの自由は、人間において生ずる単なる幻想なのか⁵⁹⁾」。彼はテキストを通じて、前者に対しては、「自己認識」のために必須のものとして「直観」を論じ、後者に対しては、「直観」によって「自由」獲得へと至るということを訴えた。シュタイナーにとって「直観」は、「一度それが得られたならば、生き生きとした精神生活そのものの一部となりうるもの⁶⁰⁾」とされるのである。そして、彼がニーチェに欠けていると感じたのは、第二節で見た通り、「直観」による自己の根本的動機の認識であった。ゲテ自然科学研究を通じて析出された「直観」によって、人間が自らの行動の動機を認識すること、このことが『自由の哲学』の主要問題であり、こうした考えは、シュタイナーにとってニーチェを補完する必須のものとしてみなされていた。かくして、超感覚的世界の認識の必要性を訴えたシュタイナーが、彼岸の破壊者たるニーチェに深く傾倒したという事実の背景には、彼がゲテ自然科学から学んだ論理が厳然と横たわっていたことが明らかになった。彼はゲテの「直観」のうちに、感覚的世界の只中に存する超感覚的なものの現れを認識する方法を見いだした。こうした「直観」の重要性を訴えることにより、彼は「自由」獲得のための要件（「認識論」の必要性）を示したのである。

4. おわりに

ここで、シュタイナーがニーチェといかに対峙したか、これまでの議論を踏まえて整理したい。ニーチェは、「超人」の問題を通じて、本来的自己の解放、ひいては「自由」の問題を取り扱った。「ニーチェはまなざしを、人間のなかの根源的なもの、自己本来のものに向け」、「現実

に敵対する非個人的な世界観から自己本来のものを解き放とう⁶¹⁾」と試みた。シュタイナーはこうした点に親和性を感じ、ニーチェに深く傾倒した。

「ツァラトゥストラは自分の感覚を用いて、世界を観察することを学んだ。そして、彼は世界に満足した。もはや、彼の思想は彼方へとさまよわない。かつて、彼は盲目であり、世界を見ることができなかった。だから、彼は世界の外に救いを探した。しかし、ツァラトゥストラは見ることを学び、世界はそれ自身のなかに自らの意味を有する、と認識した⁶²⁾」。

上記のような『ツァラトゥストラ』解釈は、まさにゲーテ的自然観に裏打ちされていると考えられる。超人ツァラトゥストラは、世界認識を通じて、此岸のうちで満足を得るに至ったのだ。この点はゲーテ的世界観と共通しており、シュタイナーはニーチェ思想の前提となるこうした態度を極めて高く評価していたのである。

だが、ニーチェは自らの行為の根拠を認識する必要性を説くことはなかった。ディオニュソス的人間が、因習の奴隷でなくとも、自らの本能の奴隷となる危険性を訴えることで、シュタイナーは、ニーチェの思想的不備を指摘したのである。先述の通り、ニーチェには「道徳的想像力」が欠けているように感じられたのであり、彼は、「自由」を生み出す契機となる動機の認識にまでは至らなかった。それゆえ、シュタイナーは次のように述べる。「ニーチェが人間の自己のなかを覗き込み、神的な人間を認識していたら、彼が熱望していたものがつかめていただろう。しかし、それは彼には到達不可能に思われた⁶³⁾」。こう述べた上で、「彼[ニーチェ 註：筆者]が待望したものの、しかし到達できなかったものが、神智学の世界観である⁶⁴⁾」と断言している。彼は、自身の思想こそが、ニーチェを補完すると自負していたのである。そして、「自己認識」の問題は、ゲーテ自然科学研究を背景に据えているのであった。つまり、ニーチェを補完する際に用いられたのが、ゲーテ的直観だったのである。ゲーテが感覚界のうちにつねに超感覚的なものの現れを認識していたこと、両者を不可分のものと捉えたこと、こうしたゲーテ的視座がシュタイナーにとって依拠すべき認識論的基盤となった。ゲーテ的自然観を地盤とするならば、自然の一部である人間もまた超感覚的なものの現れとなる。人間は、自然必然性は無自覚に支配されている他の存在と異なり、唯一、行為の根本的動機の認識能力が備わっている。つまり、「直観」によって自身の動機を見抜くことにより、人間は外的要請に支配されずに本来的自己を意識化することができるのであり、これによって真に「自由」を獲得しようと考えたのである。超感覚的世界の实在を説いたシュタイナーと彼岸の破壊者ニーチェ。一見架橋不可能とも思える両者は、ゲーテ的自然観を介在させることによって接近する。そして、「ニーチェ」論とその奥に潜むゲーテ自然科学研究のうちに、シュタイナーの「自由」の哲学を支える確固たる地盤を見出すことができた。シュタイナーは、人智学特有のオカルト的言説により、しばしば現実世界からの遊離を説いた思想家とみなされる。だが、ニーチェ、ゲーテへの思想的傾倒という事実が示す通り、シュタイナーの力点は、あくまで現実世界における「自由」の獲得に置かれていたといえる。

こうして、ゲーテ自然科学でもってニーチェ思想を補完する形で、シュタイナーは彼独自の「自由」の哲学を展開した。だが、シュタイナーは、ニーチェ、ゲーテに深く共鳴しつつも、彼らを論ずる中で思想的に満たされることはなかった。思想研究者時代、彼の関心はゲーテ、ニーチェに向けられていたのだが、そこにおいて彼の「世界観」は非常に孤独だった⁶⁵⁾。かくして、彼は、「この二人の人物のあいだにいた」と語ることになる⁶⁶⁾。両思想に傾倒しつつも、その間にあって彼は孤独を感じずにはいられなかった。世紀転換期以降、シュタイナーは人智学用語を駆使しつつ、霊的指導者として本格的に彼独自の思想を展開していった。そこで展開された後期シュタイナーの思想は、ニーチェ「超人」思想やゲーテ自然科学研究の問題圏を大きく超えて、秘教的色合いを強めてゆくこととなる。

しかしながら、初期シュタイナーが論じた「自由」の問題は、その根本的立場を变ずることなく彼の思想全体を通じて一貫して彼の中心問題に据えられていた。『自由の哲学』が1918年に再版される際に付された「まえがき」において、シュタイナーは、この著作が後期の諸々の秘教的テキストとこの上なく密接な関係にあることを強調している⁶⁷。「自由」の問題は、シュタイナーにとって、人間形成における最重要問題であり続けたのであり、この点は、シュタイナー教育が「自由への教育」を標榜することと不可分である。霊的指導者時代のシュタイナーは、実際に、そうした「自由」獲得の具体的な方途を語り、数多くのテキスト（例えば『いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか』）でその実践的方法を明示した。本研究はシュタイナーの理論的研究を本務としているがゆえに、そうした彼の実践的方法そのものの吟味には至らなかった。だが、その具体的実践を根底で支える構図を人智学に依拠せずに解明することができた。ニーチェとの関連で彼の思想を検討することにより、シュタイナー思想を理論的に解明するためのささやかな成果が得られたように思われる。

注

- 1) 小野文生 2009:「教育と宗教・超越の<紐帯>を思考することについて—『教育哲学研究』の半世紀を読み直す」、『教育哲学研究』第100号、教育哲学会
- 2) Wilson,C. 2005:*Rudolf Steiner: the man and his vision*,Aeon,London,p.13=1994: 中村保男・中村正明訳『ルドルフ・シュタイナー』、河出書房新社、16頁
- 3) シュタイナー,R. 1991: 浅田豊訳『ゲーテ的世界観の認識論要綱』、筑摩書房、訳者あとがき、185頁
- 4) 高橋巖 2009:『シュタイナー 生命の教育』、角川学芸出版、66頁
- 5) シュタイナーとニーチェ資料館、並びにニーチェの妹エリーザベトとの関係については、恒吉の論考において詳細な解説がなされている。[恒吉良隆 1999:「ニーチェ資料館とエリーザベト・フェルスター・ニーチェ（Ⅱ）—エリーザベトとルドルフ・シュタイナー—」、『文藝と思想』第63号、福岡女子大学文学部]
- 6) Steiner,R. 2000[1923-1925]:*Mein Lebensgang: eine nicht vollendete Autobiographie: mit einem Nachwort hrsg. von Marie Steiner(1925)*,Rudolf Steiner Verlag, Dornach,SS.250-265 以下、シュタイナーの著作については、[]内に初出年を記すことにする。
- 7) Steiner,R. 1986[1909]:*Nietzsche im Lichte der Geisteswissenschaft,Wo und wie findet man den Geist?*, Rudolf Steiner Verlag,Dornach,S.365
- 8) シュタイナーは、自身とニーチェの関係を、ショーペンハウアーとニーチェの關係に譬えている。「彼[ニーチェ 註:筆者]がショーペンハウアーとの關係について語った言葉を、私は自分とニーチェとの關係について言いたい。「私はニーチェの読者である。第一ページを読んだとき、すべてのページを読み通し、彼の語ったどの言葉も傾聴するだろうと、はっきりと知る読者の一人である。私はすぐに彼を信頼した。…分かりやすく、しかし厚かましく、愚かしく表現すれば、彼が私のために書いたかのように、私は彼を理解した」。そのように語る事ができる」。[Steiner,R. 1963[1895]:*Friedrich Nietzsche,ein Kämpfer gegen seine Zeit .erweitert um drei Aufsätze über Friedrich Nietzsche aus dem Jahre 1900 und um ein Kapitel aus < Mein Lebensgang >* , Verlag der Rudolf Steiner-Nachlassverwaltung,Dornach, S.15=2008: 西川隆範訳『ニーチェ—同時代への闘争者』、アルテ、14頁]
- 9) Hoffmann,D.M. 1993:*Rudolf Steiner und Nietzsche-Archiv - Briefe und Dokumente 1894-1900*,Rudolf Steiner Verlag, Dornach,S.26
- 10) Steiner 1963,S.9=2008、5頁
- 11) 拙稿では、特にニーチェ特有の形式（アフォリズム）が、シュタイナーを理解する上でいか

- に有効かを示すことに重点を置いたため、紙幅の都合もあり、「ニーチェ論」そのものを網羅的に考察することができなかった。本稿は、拙稿の課題を引き継ぎ、より詳細にシュタイナーとニーチェの関係を分析する。[井藤元 2008:「シュタイナー「ニーチェ論」の思想史的検討—試金石としてのニーチェ—」、『臨床教育人間学』第9号、京都大学大学院教育学研究科臨床教育学講座]
- 12) Welburn,A. 2004:*Rudolf Steiner's Philosophy and the crisis of contemporary thought*, Floris books,Edinburgh, p.38
 - 13) Sijmons,J. 2008:*Phänomenologie und Idealismus Struktur und Methode der Philosophie Rudolf Steiners*,Schwabe Verlag,Basel,S.51
 - 14) Lindenberc,C. 1994:Wissen,worum es geht-oder:Die<Philosophie der Freiheit>als philosophische Anthropologie gelesen, in: Dietz,K.M.(Hrsg.):*Rudolf Steiners <Philosophie der Freiheit >Eine Menschenkunde des höheren Selbst*, Verlag Freies Geistesleben,Stuttgart,S.37
 - 15) Bock,E. 2008:*The Life and Times of Rudolf Steiner Vol.1. People and Places*,Floris Books,Edinburgh,pp.119-121
 - 16) Swassjan,K. 1996:*The Ultimate Communion of Mankind A Celebration of Rudolf Steiner's book The Philosophy of Freedom*, Temple Lodge, London , p.72
 - 17) 森本倫代 2006:「ニーチェの「超人」思想—シュタイナーのニーチェ論をてがかりに」、『東京工芸大学芸術学部紀要』第12号、東京工芸大学芸術学部
 - 18) Steiner,R. 1989[1892]:Nietzscheanismus,*Gesammelte Aufsätze zur Kultur- und Zeitgeschichte 1887-1901*, Rudolf Steiner Verlag,Dornach,S.454
 - 19) Steiner,R. 1989[1892]: Friedrich Nietzsche 《Also sprach Zarathustra》, IV .Teil Jüngste Publikation aus Nietzsches Nachlass,*Gesammelte Aufsätze zur Kultur- und Zeitgeschichte 1887-1901*, Rudolf Steiner Verlag,Dornach,S.461
 - 20) Nietzsche,F. 1969:*Also sprach Zarathustra*,Alfred Kröner Verlag,Stuttgart,S.27
 - 21) Steiner 1963,S.45=2008、45 頁
 - 22) *Ibid.*= 同上、45-46 頁
 - 23) *Ibid.*,S.74= 同上、73 頁
 - 24) *Ibid.*,S.24= 同上、23 頁
 - 25) 西洋哲学はプラトン以来、感性的世界（現象界）の背後に永遠なるもの、恒常的なもの（イデアや物自体など）を設定してきた。ニーチェはそれを「背面世界」と呼び、これを唾棄した。
 - 26) 木田元 2002:『マッハとニーチェ 世紀転換期思想史』、新書館、248 頁
 - 27) Steiner 1963,S.54=2008、54 頁
 - 28) *Ibid.*= 同上
 - 29) Steiner,R. 1989[1900]:Kurzer Auszug aus einem Vortrag. Über F.Nietzsche,*Gesammelte Aufsätze zur Kultur- und Zeitgeschichte 1887-1901*, Rudolf Steiner Verlag,Dornach,S.486
 - 30) Steiner 1963,S.93=2008、92 頁
 - 31) *Ibid.*,S.90= 同上、90 頁
 - 32) Spinks,L. 2003:*Friedrich Nietzsche*, Routledge, London&New York,p.22=2006: 大貫敦子・三島憲一訳『フリードリヒ・ニーチェ』、青土社、46 頁
 - 33) ピヒト ,G. 1991: 青木隆嘉訳『ニーチェ』、法政大学出版局、208 頁
 - 34) Steiner 1963,SS.91-92=2008、91 頁、一部改訳
 - 35) 彼はそのことを、1894年12月23日付けのパウリーネ・シュベヒト宛の書簡で語っている。「私はニーチェの病気を特別な痛みと共に感じています。なぜなら私の『自由の哲学』がニーチェの傍らを素通りしてしまうことはなかっただろう、と確信しているからです。彼は自分が未解決のままにしておいた多くの問題が私によって敷衍されているのに気づいたでしょう。そして彼の道徳観、彼の背徳主義が私の『自由の哲学』の中ではじめてその画竜点睛を得たこと、彼の「道徳本能」がふさわしい昇華を得、それが私の「道徳的想像力」にまで変容したことを良しとしたことでしょう」。[Steiner,R. 1987[1894]:*Briefe II 1890-1925*,Rudolf Steiner Verlag,Dorn

- ach,SS.238-239=1986: 高橋巖訳「シュタイナー書簡集」、『若きシュタイナーとその時代』所収、平河出版社、235 頁]
- 36) Swassjan 1996,p.72
- 37) Steiner,R. 2005[1894]:*Die Philosophie der Freiheit*,Rudolf Steiner Verlag,Dornach,S.169=2002 : 高橋巖訳『自由の哲学』、筑摩書房、225 頁
- 38) *Ibid.*,S.132= 同上、178 頁
- 39) *Ibid.*= 同上
- 40) Palmer,O. 1975:*Rudolf Steiners on his Book The Philosophy of Freedom*, Anthroposophic Press, United States, p.xiii
- 41) Steiner 2005,S.138=2002、185 頁
- 42) *Ibid.*,S.203= 同上、268 頁
- 43) *Ibid.*,S.163= 同上、217 頁
- 44) Nietzsche 1969,S.9
- 45) 吉澤傳三郎 1964:『パスカルとニーチェ』、勁草書房、342 頁
- 46) 竹田純郎 1997:「近さと隔たり—ゲーテとニーチェのあいだ」、『モルフォロギア—ゲーテと自然科学』第 19 号、ナカニシヤ出版、49 頁
- 47) なお本論考はシュタイナーとニーチェの思想的連関、並びに両者の媒介者としてのゲーテの存在を暴き出すこと自体に主眼を置いているため、紙幅の都合上、シュタイナーとゲーテ自然科学の関係を詳細に論ずることはできない。シュタイナーとゲーテ自然科学の連関については別稿を用意している。
- 48) Steiner,R. 1993[1918]: *Goethe als Vater der Geistesforschung, Das Ewige in der Menschenseele Unterblichkeit und Freiheit*, Rudolf Steiner Verlag, Dornach, S.79=2009: 西川隆範訳『ゲーテ—精神世界の先駆者』、アルテ、16 頁
- 49) Steiner,R. 1999[1886]:*Grundlinien einer Erkenntnistheorie der Goetheschen Weltanschauung mit besonderer Rücksicht auf Schiller*,Rudolf Steiner Verlag,Dornach,S.9
- 50) Shepherd,A.P. 1983:*Rudolf Steiner Scientist of the Invisible*, Floris Books,Edinburgh,p.53
- 51) ゲーテ自然科学の概観に際し、ここでは特に高橋義人の研究を参照する。[ゲーテ J.W. 1982: 高橋義人編訳『自然と象徴—自然科学論集』、富山房 とりわけ「解題」を参考にさせていただいた。]
- 52) 高橋 1988、206 頁
- 53) シュタイナーによれば、ゲーテは常に、「自然内のより高次の自然」を直観していたのだが、大槻が示しているように、ゲーテは、こうした「直観」をスピノザの直観知 (scientia intuitiva) から受け継いだ。スピノザにおける直観知とは最高の認識能力を意味するが、ゲーテはスピノザのうちに自身の自然観との親和性を読み取ったのである。[大槻裕子 2007:『ゲーテとスピノザ主義』、同学社、156-157 頁]
- 54) Steiner 1999,S.111
- 55) *Ibid.*
- 56) *Ibid.*,S.11
- 57) 例えば、『ゲーテの認識論』における次の一節は、『ニーチェ』で記されていた内容と同一である。「人間が自らの内に行為の理由を持っていないとき、即ちある掟に従わなければならないとき、人間はある強制の下に行為しているのであり、ある必然の下に置かれている。そのとき人間は単なる自然存在であるかのようなのである。だから私たちの哲学は、最もすぐれた意味で自由の哲学である。これは、人間が言葉の最上の意味で自らの主であり得るためには、世界を外から導いている諸力がすべて除外されるべきことを、先ず理論的に示す。人間が行為するのはそれが命じられているからではない。人間がそれを意志するからである」。[Steiner 1999,S.126=1991、122 頁]
- 58) Steiner 2005,S.7=1981: 本間英世訳『自由の哲学』、人智学出版社、5 頁
- 59) *Ibid.*= 同上

- 60) *Ibid.*= 同上
- 61) Steiner 1963,S.92=2008、91 頁
- 62) *Ibid.*,SS.47-48= 同上、48 頁
- 63) Steiner,R. 1985[1904]:Friedrich Nietzsche im Lichte der Geisteswissenschaft,*Ursprung und Ziel des Menschen Grundbegriffe der Geisteswissenschaft*,Rudolf Steiner Verlag,Dornach,S.182=2008: 西川隆範訳「精神科学の光に照らしたニーチェ (I)」『ニーチェ—同時代への闘争者』、アルテ、142 頁
- 64) *Ibid.*,S.183= 同上、143 頁
- 65) Steiner 2000,S.266
- 66) *Ibid.*,S.259
- 67) Steiner 2005,S.9

本研究は平成 22 年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の助成を受けたものである。

（日本学術振興会特別研究員 臨床教育学講座 博士後期課程 3 回生）
（受稿2010年9月6日、改稿2010年11月26日、受理2010年12月9日）

Steiner and Nietzsche: Goethe's Natural Science Hidden in Essays on Nietzsche

ITO Gen

The objective of this paper is to analyze Rudolf Steiner's interpretation of the theory on Nietzsche in order to elucidate Steiner's philosophy of freedom. As we have seen, each analyst has produced a different interpretation of Nietzsche up to now. Frequently, analysts can be projecting their own thinking on Nietzsche. Steiner also projected his own idea on the theory of Nietzsche. So through the analysis of his understanding, we can read his interpretation of Nietzsche into his own thoughts. Steiner was a student of the philosophy of Nietzsche and Goethe's natural scientific studies in his time. He was outstanding in scholarship, but around the turn of the century, he became occultist. His essays on Nietzsche were written, however, before this happened, and I think they express Steiner's own idea, the theory of Anthroposophie. They are regarded as a touchstone of reflecting this idea. Steiner said his philosophy of *freedom* was directly related to the theory of Nietzsche's *Übermensch*.